Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

1281
3

千代曩媛七変化物語巻之二

東都　浪鷺亭主人　著

村田本

玉谷仁義二嘩出邑
出邑行智二欺玉谷

玉谷真平雲気の奇特より砺並山と乃指南得るが如くあく遊あるあく
と自あくして具梨迦羅嶺あそ出まる此所八越後越中の界あるが上久る宮の
堂あるて石鑿のあとりつく此明ふ郷ずるめつふとつ越夜とくき兆あるめやとつ
扁額とあもざっんまぶ倶梨迦羅不動明王とうそ是即八釵大芋の変化
真平大よ言くも元来信ぞる明王ぞ公ふ感ぞるの斜ふ
くき媛沈が自ぞ世泰ぞ世其弱八越夜とぞ
も下人あ多りの山谷堂の前よざめさ来りたや暁ぞとつふ屯沈惜人の

荷馬二十疋なれば従人等馬士とも二十人あまり有けんや或は斬ちらせしに(?)
あるは庭に楫葉と共にくさり園に烘けひらに无礼言ひてざよめきたてし(?)
体を従らく堂坊出て多勢がまといゐる真中に割て入坐る手と坐し行(?)
さびしくも有つるに今一齣の勢と添くれたれば夜と共に語あんと戯て言されば(?)
無の醜たる態して那奴力の不狂くるかなど打笑ふに真平も共に打咲你等が縁起なし(?)
ば有もせず物とられぎるもあるべし但し修行の獄なれば却て你等より施を恵へ
といふべしやよ那奴天骨もなき奴らなりしに引剥るも足らば野に臥山に餓死つべき
二所不住の境界なれば寧ろ我々が徒黨となり活計飲楽に南面王の娯を究んやと
いふに真平も又你等もまた一個の壮士なるが二ツなき頸をもて危き経営をせんより
急く我従弟となりて天年を全くせざるやといふにさしもの言は你説ぞと洩く
識とに強なり聞ず頃日一個の強傑此国に来て我々を催ふして幾多の余

徒を集ぬ素より軽捷兵ろ不達し水練ハ婦吏弓なんどが養由悪所岩石を
駆る事ハ恰も鳥のひと其膽飽まで硬く人の趣を残害こと塵泥とも思ハば
怪力強勢なると誠に寂なり立山を山塞と定め越中前後の州に横行し袴邑
なせど捕る手なりがたきハ毎にあるうとぞくが忽山なる神変自在の尋都
那の魔法を行へも尚も邪法成就のさや千人の首を斬て砺並山に塚を築く
ありなるとば你らも頸塚の首に入る事喜さ毎とらん玉谷手を指天晴此奴ハ悪を皐
とも知れざる大悪無道の者なり人の頸より己が頸の飛んて道なるを知らざる悲
哉你等ハ後に人の釁に染る小賊なるらんが五常乃道も知らざる徒を思へる
らるハ賊盗に入ゑとそうするまでといふに遂ハ珍し盗にも五常の道ありと聞いづく
に適とてあるさとあれん盗竊にも仁義礼智信の五ツの道あくしてハ行る
むかしも夫闇に人の蔵をあるハ知なり入るに前ぞ勇なり出るに後るるハ

義なり救なるときハ命をもすてざれバ仁なり分つて均きハ礼なり然るときハ人として此五ツの
その備なきハ畢竟汝等が徒ならしとしるべしといへどもいまだ賊等是ぞ聞て何さまと
おもへる色なり真平再び大盗豈摑戸を穿んや吾人を殺さバ千人ハ千人が命の大干
世界の悪人原が頭を悉く斬つくさんものをと漫ろに賊等骨ある其の言
なりけるをきかバその膂力を見せよと口々に罵る真平何をかる先指頭の力量を
見せずやと辺なる大竹を指にて拉しよ忽ち微塵に剥々と割てめつきと折て
半も是をバ賊等らしくなりまいて言を追て真平又吾脚を見よといふ本に崖の大なる
巌石を蹴とばし其いきほひ一脚蹴るが翻りて遙々谷に落たる其音谺に
響て轟しけれども猶も悪なり賊等いよく肝を消も真平自若として去るに札山
と蹲る竹を拉ぐ普通の力業なりと熟練としよの地祝ども咄さとて山被の[illegible]
なる所に揖の大木の幹ハ二周余もあらんぞやと見るを根本より徐々と押[illegible]
ぐさしもの大木弦のごとくにそり返て冉々に押屈られ忽地にぞ着ければ真平その
上に轟と蹲くまさ発設しに衆も懸よと笑ひて賊等ハ此形勢を見て一同に大
地に蹴き人間にてハよもあらじ命ハ助たびねと惶惑ふさまのかなしさに我ハ是
八臂六足あるにもあらねど些しく尋常の人に異りて力の優るのみ汝ら
共に蹲て詰るべしといふにぞ賊等ハ同辞も恐しく一同静に蹲しが盗魁なる者ハ
何とて来ざるぞと問にぞやや来るかといふにぞ玉谷心中に此盗魁なる者ハいかなる者
ならんと思る者ぞと腕を麻手て待ゐたり多時ありて賊等らしと盗魁こ
なりといふに玉谷見てあれバ裕乃ととびとける雲を衝なる大の男小山のゆるぐごとく
歩みくる近くなるまゝに見れバ頭にハ茅屑巾帻を被り身にハ熊の皮を纏ひ脚にハ京
の草比行縢をはき友柄巻の大きなる刀をさしぬね既に面と面を合つるに吉ゝや出来
震平なり此邑ハ来りや玉谷とみるより其まゝ詰よれと云まゝ逃出も玉谷ハ又奴の人

王谷具
平俱利
迦羅山
賊塵

と起上る汝らとなり天木忽ちあさうくると齊ちく踞ゆくる賊等退きもあく〳〵く
虚空ゑ掀翻さる一人も残らず谷底ゑぞ落うるる玉谷へ難あく跳ろうて出
邑ぶ頭を搔抓く擯ゆて膝の下ゑ百と押伏くゑ挫ゑせんとも出邑声と牽一方の
言条あり昔時用堂禅尼你と吾を兄弟とす〳〵取你左ゑの李指と抓く
一生骨肉を分ち兄弟ともゆ〳〵〳〵とい〳〵〳〵ぞよ吾もそのとき背ゑ刺ゆて俱梨迦
羅龍ハ你の稚名殊ゑ俱梨迦羅龍王の堂前ゑり祈言とも破て你ぶ骨肉内前
と斬ばきとそと侯ゆり玉やハ原より義を金鐵ゑ守る士るれば乞ゑもりハ神
此奴今我ゑをうぶとも天眼入力何ゑの所ゑ免さん一般ハ助力やゆんと押へ〳〵
肘軟ゆるゑ堂の内より千代曩媛去ぬ〳〵く島辺山ゑく再生の恩ゑぞ狂て咨
ゆりてよと宣ゑ玉谷ゑ赤き汝詞ぞ你ゑる刺ゑてもるゑよ早く今までの作業成
悔く善ゑふるぶ〳〵ひゆるを〳〵と因果を悔くゆて竟ゑ

放〳〵て譯ゆをぶ出邑嵐の逝るぶどく去ゑゆり玉谷ハ尚も乞ゑりて烘火のゆ
簡狭捕とゆ〳〵てゆさゆ案のどく弦音羽音研〳〵て一條の前ゑうふつと来く光ゑ
て貫ゆ徒ゑ豊花ゆるゑ晩〳〵偏ゑ玉谷ぶ零智の徳ゆるゆゆくて北地の習十月より
雪ふり往来もゆ〳〵ゆをべ主従明王堂の内ゑ潜ゆくその年もくをふゆゑ奏ま
出邑震平ハ玉谷を射殺ゆとゆひつ越中ゆる高岡の庄ゑ郡二とくるゆのかけ縁の
部下ゑ出邑ばられゑ傷ゆく早苗ゆるこ病ゑもゆるゆるゆる日芝生壮ゑ倨子等相撲を
とて遊頑ゆるゆゆ〳〵此童ゑ丞の種子と色ゑ姓ゑぶゑ〳〵ゆ忽ち好計とゆ
ぶ〳〵郡二ぶ兒郎を支るゆ〳〵ゆ〳〵ゆゑ撞仆ゆ〳〵ゆ息とゆ〳〵ゆ倨子等と
〳〵ゆ〳〵ゆゆゆも兒郎と拙稚ゆる者ハ懐木の寡ぶ兒の篠ゑ郎ゆりといをせゆり庄
官ゑ三と云ゆ〳〵ゆ村老の輩衆議〳〵ゆと稚ゆき力ゆ〳〵誤ゑゆとゆる〳〵郡二と者れ
どもゆ〳〵ゆ〳〵ゆ忽ゆと譯ゆど倚ゆ〳〵ゆて出邑と憑山震平元ゆり巧色ゆる事

るとて郭二と説ふせく一斤（十六兩）の金をもく其罪と贖ひきまぞるとり拯ふ此擾
木の寡とらふの丁比築作ぐ妻ふ〜て國内阿陵の年築作めせざのこゆふ都ふ上
アそろより三年その以降病ふ〜些の田園も債の換りる失く売て朝暮の烟とさて
めゆる生邑ちてまもゆく一斤の金ハ某の日まぐと限り〜その日整ねハ女兒ハ女膳を
妻ぐ〜ふ契約〜又郭二ぐハ忍を宥ふこゆと綾左郎ハ生家さまべき夏ゆぞ計ハね
さまぐ金の濟まそいと母ふ鎌子と約ふること築左郎七歳未満ゆまぐるり拯ふ
姉の小女膳ハ十三茅芽の築左郎ハ六年ゆまとるぐ兄弟をとり怜悧〜て孝行
孝行ゆり姉ハ雇ちく麻を刑蛮と納め糸と繰布ハ織紡績〜て其日の扶薬の
料とし〜芽ハ又人の草と苅て売とり〜ひ或ハ摘草〜て里の巷ふ立ぢ是と售
其價ゆく菓子ゆどちく母ふ與ふくて兄弟ゆるぐ母と労を按摩を挑
と扇ぎ床を温るの人保尽さどとして〜事ゆ〜清〜〜ゆるゆ女ハ鎌子とゆるれ

ぐ病のうくゆふとゆふ〜ぬ歎ゆく朝夕の糧とも兄弟〜く母の口ふ餔め喰せ粮ハ
有揆ハえるゆも絶〜哀ゆく人〜其孝ゑと憐さるゆゆ名りさる程ふ金濟と
べき日もくつを限アゆく一次の資さくゆるとぐハ築左郎と祖父ふ入ふこと
六ゆく生道最愛子の救子髪不そさ不そ頸と又の下ふちゆとと母の歎
とゆ〜ふ耐ぞ小女膳母ふ申ゆうつ迫とやうく思ふとも金の天より降地より
涙ゆもゆ〜さまぐ吾身と售芽の禽と叔さぐ花街と母〜ハ怖〜さ務
ゆとハ閑ゆとと生ぐゆ〜の苦ハゆるだりとてゆとハべきさぐ乞とりの兄と濟の
河原ふまゆとハせく姉も生てやあるださろ母上ゆも歎死もやはゆ〜ん親子三人
の今をぐ繋ハ絶の金ゆく些の間の生別ハ死別ゆハたりとふまさゆめとく
吾身ととと思ゆさりゆぐ〜ゆ乃病と誰ゆ労て誰ゆ看病参せん〜ハ
りゆ乞のとりゆハ数とも諦ゆと言ハゆく乞ゆハ今費限アゆ余彼ゆく

母の面の見おさめとて目に満くる涙をぶ母おんぜと嚙る藤吉郎ハ姉の
詞とうるぐと涙さ〜ぐ〜閉めるが急まあつと叫び出〜いるく我こそ人とお母あられ
び叙さとふたやくにそるくゆさ私姉と傀儡お貫こうと邑の児等おれ
まるく友交もあ〜ざるぶ門の擐木お首縊う向ひの渠お刃と投く死もせぶ母上も
嬉しも哭ハまるぐ悲さぞ吾ハ男らもう人とあやめ方のうとりつく死ぬるう何ぞう
嬉〜さそたあ〜く涉るくいくるびてよ母上よ姉上うと瞬をとるう胸孤もう
軀と岡〜ぞ哭ふる母ハ兄弟が健氣ある有様を祝く曾も八裂おさるうとぶ
弟が命も助るとし姉も何とく情あく人貫人おつるべうと彼を思ひ当とし
ぶ免やせるぐ〜角やうと氣ハ狂乱のどくあく親子兄弟死ぐ三人ぐ〜ぶ
ぞ手もゆうざるあと笑う三とせ尓来我伏保学ぶも稀ある孝心ハ刃の代
わくそむ手あう母が死ぬべき義ぶるぞや親の欲目とりなう兄弟優〜く

上ぶ得く貪〜さ苦労ぶさ〜ぶ果報拙ぶるの者どもよぬぶんのかわと
掻口説いぐきたるさも鎌子ぶう投ぶさぶも手ハ吸ぬ溢次弟の泪とぶ兄弟
左右の袂ぶくねぐど尺〜ぬ涙の雨真の雨もたうくと屋の破を漏ぶ
只一枚の被とぶ兄弟母ぶ打ぶせる母の慈悲心いぐくとて我子ぶ兄を被ぶと
も妹ハ弟とあうぶとうく藁筵を弟ぶあるぶ弟ハ又姉ぶ譲りてその刃ハ
管の小笠とうづう飢ぶる腰とうくつ雨ぶそぶてる有様ハ我宿ぶぐ〜の野ぶ
甘ぶく親子三人頭とし舎ひ終夜泣あ〜〜るぞ哀ぶる次弟ぶ
さる程ぶ明ぶぶ邑訪ぶ〜いぶ金やとの比又ハ小女膳とやうぶ三俣藁
右郎とぶ叙さぶ者と追ぶふる母も今ハ絶孫絶命とぶ拠ぶく出邑ぶ夏山仕
せるぶ〜と言〜く紀子余波の泪ぶ嘆咽しふひ中〜邑ぶ中どもぶ〜めくて生
邑ハ其日兄弟と伴て越前の川へ発ぶ〜ぶうさぶも擐木の寡ハ羽翼と憑む

兄弟の子まうけられしよりく力あく邑の扼捕ふるるよりへ僧死ぬるあるよそう國
紛ぬ野中ふ仆死ぬんかく命あるべ夫藥作ふ面ア會ア丁やあるとと二十四
輩の順礼とぞろひ立るゞ元より田産ハあるく絶の家一條と活打あるく て旅の用意
とと一郷の者ども哀あるるふ言つくく閉ぢくく銭を聚て布施とあ世ゞ凡三
朞余あり寡ハ行慈の行季あどの孔旅促裝あるくを使て出邑ゞ飯り所
待いくり爰ふ出邑ハ藥吉郎と銚前の永平寺ふ雛曾ふ售小女膽とび三国の
廓ふ賣ふるるそもく三位以上の法娘と小女膽とハ申せど此寡ゞ女児いろ
のる公郷の法女とても耻くく祇中とておのづくく小女膽と呼ふせるゞさまば
天い成せる醜質ふまび曲身の金三介四十八両あり とあるを出邑とを掠め高岡ふ
立飯アく寡ふハ一介十六両あり の金とうと紘と村長与三ふヤくまとく事と速ふ
治くハ出邑ゞ計ハ伝使あるうと賞義せりさくも寡ハ一介の金を得てあそ

ふん金と濟くく蘇子とも脱ふハ嬉くくまとゞ二人の子まそ紛ぬ浦里ふゆきその
外も故郷とまるれゆくゞて短き夏の夜ハ雪ふ血をちく杜鵑小田の蛙も帝ふ
後夜も更ゆく鐘の声いと辺ゞそきあるとそあれ門の戸所拆たるを艇拵入て
行燈の行季を小腹ふ加くく洋々と出る者あり寡ハ孩くあるとも愚ふて捕るあるとそ
ハ脇ね蠱にあくあると放さゞと前ふふさゞり面とえとバ出邑震平あるいよく
疲くやよ法才憑く祝せつる俤あくありとふさもあれ余アある金ふ何とく
隠くナくきに粥も哀とハ心くハとそ計ふくきび五一介の金ハ可歩ア小女膽ゞ
身の膏を曬ふる金ふく藥吉郎ふ角の根ふるびくもく粥ふ進せゞ腰膝紀ぬ
ふあくみて叫る瀧ふまふ対ふくざる者あれば情とふるせうびてとて哭ふ
と震平撲地と蹋倒くて足下ふ蹈へ僧もとけぬ中く競め美壇のくやげふ
詩りて閉ものと小女膽ゞ容ふとんとくゞ弟ゞ相撲と支ゆるふりくて吾言

出邑震いにぞ平小女
騰ゞ母と
殺ゝを

仕掛ける郎二が子の児郎と称しぬ是ハこれ或ハ掾或ハ省中そなが宮ゐ〻〻〻
や築き郎が所為とうゝ永平寺の雛僧と化て香料を甘〻めず小女膳を
遂三行小賣く昼一行と保まるゝ今夜の攻盗音〻〻と祝をゞ答りいろふ
寄〻ちくしやとほく〻く肩あく北東咲脚あく揺ア動〻れば〻ちもゝや拿れ
其金と遣べきと称ハあ女ども手ハうゐ出邑さゝハゆの働とさゝ〻と傍あ
擦刀ともつ執ゞハと衣の肘と防ちるせゞその手首ハ左のゑ北鎚ゑ〻つ〻〻雙ふ
撓下ゞ寡ハあと叫びあゞゝも尚斬ら邑ゝと切あゞ〻擲ゞよる称紐世の衣
ゝまんとゝて出邑拿指とゞハと嘲ゞゝ此時尚あゝ塘ゝるふ吊灯のあゝ〻ゝれ
ハ出邑ハ遽て〻拿指をとらあくゝとるふいろあく〻ゝ邦さ行ゞ為ゞあく〻外面ふ
走出るゝ寡ハ指と御つ却ゝらゝとあゞゝも尚放ちも〻ゝねゞ出邑祝るふいまゞさ
死ゝ〻ゝとてゝ〻の眼と貯あゝ指とゞ折防ゝも力あゝゝゞハ辺の坐の中ふ動ゝ

ゝ翻車の下あく寡ゞ〻る水を灌ぐ〻ゝあつく搦る水ふ耐ゞや有ゝ〻称
ゝるゝと思ゞゞゝも指ハ咬防ゝと来る人近くあゝゝゝゞハ此ゝも流失る爰ふ村
長与三ハ今宵隣村ふ永入〻く更闌今飯ゝあるゞ酒気を帯ゝ〻ふのあ〻ゝ様
楽を謹ゝく田の堤沢擲ゝゝるゞ酒ふ来る〻〻〻ゝ咽をゝるゝゝと翻車ふ立倚〻ふ
車更ふ旋らねゞ与三評ア此流急ふ〻〻く遍〻くる翻車ゝゝ限イ動を止ふ為
ゝふ沼ぬ車ゝ形と吊灯をゝゝゞ水面を覗ハ寡ゞ屍翻車ふ乗ア〻ゝ与三驚
あ〻て屍と拉揚ゝゝるふ拿指をゝゝふ咬てゞ死ゝゝゝ是ゝゝ金謎の墓ゝあゝと
狂ゝ〻ゞ推測ふ今宵寡ゞ金の有て称紅ゝるゝのく亦為ゝく一郷の内ア
出ゝゝ〻ゞ吉苟村去庄友ゝて此賊を捕ゞゝハ有ゞゝ〻ゝと信用ゝ〻ゝ〻ふ
ふ飯ア奈何ゝるゝふ母屋ゝゝ邑厠ふゞ火を焼ゝゝるゞ時分厠ふ
〻く勿ゝ焼火ゝとゝゝて煙ア天ゝゝ掠ゝく吹掩ふ与三ハ急ふ螺螺貝ふ鼓撞ふ

と称し、世び村吏の失火と祝ぐ我もくと縛つるアマ一行の前を曳拒めふせを治
まび酒盃を開く村民等孤労ひさて与三衆を射ぐ寡ぶ殺さんうを
てのち故さと失火をもーく不宇ふ各を集ーふ一郷の人ぶるの李を指ふ抜び
んが考ありとうふ衆芝を聞て村ちぶ頓智発明を感を与三ハ侍圖帳を以
て一人々々検ーぶ指を傷るカの抱くあーざしふ生邑真平只一人ぐうとて俺ー
とうつる衆人去這奴程性も知まど遊版流歓の徒を曳極く汲ーさらば
捉ようとて幾多の人数郡二ぶ家ふ奔ゆくふ生邑ハいとく酔く昌被ふて臥めくる
左の手乃秀指正ふ断ーくあるびされびとそとありうさく高ふ小ふ搦て村吏
が家ふあでーうあるる生邑此時酔醒く祝ぐふ村民等左右ふ居るぶ与三上れ
坐ふ臂を張く你がその指ハ如何と問ふ生邑ふふ孩ぶ面ハ色ふ変じて見ハ
酒ふ酔ひく荊棘を刺とて纏ふく誤傷ーとうるまびさーふ疑ぶるよ寡を殺し

つるハ震平秋ありと早く招よくとて村民ふ呼ぶくふ責問ふる聴ふ震平差ありのいえ
ぶるくふーとうふ者あり此声傍の廂の裡ふまび衆此白何ゆ知くいふらんと不審し
生邑も何者ぞと見ゆ多ふ此人ハ豈即玉谷真平英忠ぶり生邑ハ一目知く恢ぶ驚ぶ
起く近んとふとふ縛ふ罹ぶく拙ぶくらまで玉谷ハ又生邑と見ふく跳ふくらんとふ
ふ五蔡脳て一ふも起ぶ言んとふるふらとふ互ふ目と目と見合せく肝ふくふゆまび
村民等ハ其公を暁ふく彼を祝ぶ祝ぶくふび痴ていふうふ是奈何とふまびば
玉谷三郎援金百の士ふまび佛が原ふく死世丁の築作ぶ元の金をび故園の妻子を訪ふ
てふんと此郷ふ捜ふつるぶ遽ふ遽ふくて及ぶ泥村ちふ社ーふ与三ふ此廂ハ便ふ悩
臥てゆくるふり拉ふふ今村民ふ生邑を強く責く震平招ちとうふ声の耳ふくふめ
祝の事ふと思ひ真平ふ事ふうの覚ふーと熟ふ所于ふ不覚ハ見ーふる多ふ此時玉谷
ぶ和ど戮ふ形勢を祝ぶく生邑公の裡ふ這奴瘧と病つるとて幸ひ言を巧ふくて

脱出せやとそゝひ渠今問も女ぐるふ真平平えぼと言ふ曲事あり渠ぶ指ぶ検
まつとゝくるまぶ与三郎ゝくまく玉谷ぶ指と換るふ左手の薬指あゝぶれぶ左手不審
ふ玉谷ぶ此指ハ昔時出邑と兄弟の約言ふ引ゝるまぶ陳謝せんとまるふ右をくゝ
て詞出されが村民等いふく怪ゝまふ指ふとゝく亡く名も同じくまぶ出邑とそれぞと
も無ゝくもしふ玉谷ぶ侵ふ竹篭の行李あり景ふ薬作ぶ行李まふく証のゝあ持ふゝし
と村民ふ中を換ゝふ一斤の金出く待と節を食ふ佛とそ寡孤殺ゝて行李とるふ
金を奪ひゝふ此徳行者ふまゝられのとて忽ち郷ゝく出邑ぶ縛ハ解ゆるせり玉谷ハ
ひぶふ梱まく事の由縁を審ふ悔んとまゝりふ口呻吟くるを祝ゝく出邑ハそこゝ
何夏ふ膳言ふ吐ゝく又一二の殃を惹出ゝくんとて口ふ絵藁を餌せゝり玉谷ぶ
行んのぶゝくもし口嘆ふ顔回ぶ聖ふゝて陋巷ふ夭死ゝ盗碩ふ邪悪ふゝく福壽ふ
豈非天乎と哀を催ふゝいる処ふ箕巻ふ川ふ出邑ぶ債ふ苦いゝく則を煙ふ

その僕ふ燭ふ為せゝと園て村民等玉谷を引出せり誠や猛虎の檻ふ蕃りとゝく
居所の羊の歩ふ二三丁あゝり二所の芝生野ふ到ゝ繰ふて来の軒ふ接き
猶菓十数把累ゝと積ゝ弘燻殺ゝんと攜ゝり玉谷ぶ出
ゝて一谷ふ殖ゝ吾運命の拙ゝとゝ思ゝ嫁君ふ如何ゝ
うんと思ゝる処ふ邑姫の潜生ゝ件の父を脅ゝて玉谷怒柔天と
衝只一挫ふせんとあれどその朽木偶のゝくゝ出邑ふゝ眺ゝと輩ゝ
て着る者ども不対ゝ弘ゝ人ゝよあゝきゝ詐奴天骨もゝさ大
悪不乙の者ゝ我ゝも究屈ふ殖ゝんとゝ出邑が天乙善人を救ひ玉ひぬとて胸乃
鬚を捻ゝ因果遥ふ回ゝそゝる形勢ゝり又此答の理ふゝりゝ佛ゝ
岡泉ゝて衆人ふ拝ゝせゝと天にあひて象ゝ笑ふ玉谷ひゝく怨怒殆ふ塡
膳を齋ゝと出邑ハ乞地ゝゝくと古紙舐ゝ北叟嘆ゝ癒て指ゝる火を焼ゝ

既ふ炎々と炎り烟空ふ立昇り火十方ふ沒しぶ忠臣天の祐る所も玉谷瘧病火気ふ觸れて寒熱全く醒く四肢と搖ゆるとえくしぶ織の漲すふ抜汗精力と奮ひ火の中より躍出こうゑ圍て観わる者ども驚き彼也いふ猩々その色喪ふ混さ泳ぐるとて田の塘ふ塞ぐ或ハ泥田ふ入と或ハ塹壕ふ落る出邑ハ竟と天外ふ逃さして大地ふ百ど打坐ゆ玉谷頸と押へく拯伏せ你ふも忘れて一さびハゆるさじと閑果とふくめ俱梨迦四雅嶺ふく一段死を容世ハ全く信義の二字ふ憑る人ことこ擯頸ふのてとも你ふ生ハ遺ふ出邑素とう玉谷ぶ弟公の篤ことと知るぶ故ふと詞と厲して我えとう你ふ請ひたことと知なりさうぶ〳〵完期ふ答仏と拜し参せ也你が秘佛の扉を開ざるハ此ア〳〵く我忠公さぬ〳〵どやとやるぶば玉谷ふ伏閑く乞中再び容さんとして某苗勝の搏ふ打ちぶとえつも押〳〵ふとぶ放ふるぶ出邑ハ地ふ拜して紀んとと玉谷

ぶりハ此機會晩々と又喚く莫んとふぶ出邑地ふ踏ハ念と遺ふ動ふとて手と束頸と伸く減ふ拠ゆ〳〵ぶ祝ぶれば玉谷ふ伐ふ恐ぶと竟ふ譯せぶ出邑ハ和塩無る面のちてぶ起去るかくて村民笞ふ玉谷ぶ一伍十を問きぬめく佛が原ふ人と遣し僕仏ふ墓ふ發て捜一ふ完く一斤の金出るれば玉谷ぶ信義章ふ人ふ悉く感じ恵りさるふても再三出邑と容世ハ緩ふ〳〵と傍人いくふ玉谷ぶいそく四海皆兄弟と人君子の公ふり佛の乃ふも人ふ永の隔ゆ〳〵岩間一切の衆生ハ乞皆他生の骨肉とふるとさハ誰一人厭惡べきふ哀く憐〳〵て悪さとも善ふ道ゆく習ぞやとやるぶば村長ふ三ふれ彼ふ村美獪の人天下の法傑ふりと学〳〵郷民笞とぞりて玉谷ぶ德ふ伏し〳〵その落人ふ東流ふ〳〵も潜ふ木の葉の里と人所ふ匿ひることとふり

五　房

木葉正曲再會夫
荒妙媛粧齒嚼夫

千代壽後物語
巻之三
上
毛深る
木の葉代
里乃唐綿
あくな
きらそ
夜の山
う野

菅の山乃梯木葉の里比あり遠里遠しく人煙幽に山深しく鳥の声稀に前に
渓川に架てしるし拵柱打て祝ても危き柴垣ありて山陰に木葉に埋る草の菴
あり人もなず荒る家の垣門まばらに軒傾て時雨も月もさこそ漏ちめと見へる
とにく淋しく荒木とりて柱と往昔法師く屋を覆ひ真平陽家に穴窟
の地ありと千代曩媛と志のゞせ奉々其祀に猟師ゆく常の業作とせり結し
ゞ姫君もいつしか木葉とりく賤女に安寧して憂の中に苗ちね月日の駒の足
早く既に三年の春秋と往に慶長二年十月朔日にもろぬ北山殿滅
亡ぬ一日にくさ俊秀朝臣の大詳忌に責ふ亡夫の霊魂を慰め
ぬ〜さまやとあし呉に妙せ〜人鼓舞婆とろ泪と共に操ふく青海波を調る
繊珊瑚と砕く一両の曲水三盤に落千萬色雑猜る其声に谷川の音に紛つく
絲〜るゞうゞに我に関へる時に栄の戸乃外に彷徨る人ありくあやしやおぼる

片山里に人住ぬるもあ〜ふくに都にしき擾音の気高く哀なる主のありさま
殊更に忍ぶ〜そいとゆる人の徳を隠〜く知る〜捜ふ物中に人とあり昼
ぎふも人も訪来ぬ山里の草乃菴比内美昏ふも誰人のたゝ〜ぬ乃ふ〜ふ〜ふ〜は
ろの人菴て時〜もあと二村雨の小止の程木の下蔭に立濡て笠宿とる立寄ぬる
ぶ柱くちぶ〜の程毋をそ〜ぬせ〜めとりふ木葉ふ立ぬ時雨の空に立まよ〜を
いぬせき宿のたゝ〜ぬ〜ぶ毋もとき夏とるこへいざ〜とそりられバの人聽て
立入〜内の奥ふ入廻るぶ減に行荒しゆる蓬生の宿乃荒〜きに庭に茂る艶
りみぢと乱〜て散〜きそとゆ薄もひ繁き筧の水の音ゆ〜でぶ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
てい入る何と中〜木葉ぶ姿ゆ〜ゞ上に渇色の中にとる衣に下に絲
資の二重衣を着ゆ〜ゞ裳裾の白地ある面影に人熟〜と寄ぬ中に
ぬ〜て帰りあれどかゝる所に夜ゆ〜ゞ中に和君独住ゆんどゞ〜ゞ中に祝へ

ぞくもはいうぐひすうぐひすやうど問まとく木葉ハ顔寸あらめ謀まふる花
梢の夕嵐軒ゆる月の影うぐ宿ハ問人もなき宿あるく侍り色染る木の葉乃
里の唐錦あ〜くるぐちて菅の山ろ〜と古哥まを傳〜も此里の寂〜く思ひ
ゆ〜れう〜とふまの人きるあそもかく〜元主の賤ゞ伏屋の粥ゆ不應い〜ぐ調の
音あ〜んとふ雅ゆ知るべき遥ま閑答〜〜ゆ問まの〜とありいろさるぬ〜ゆ由ある人の
果さ〜ぐめけ〜まゞを語ゆ玉くとふ木葉ゆ狭と掻合謀ま人負ゆ〜ぬ姉女ゆ由ある
者うとゆ問ゞ答〜ゆ詞にそ有ゞさるぬ吾儛ゆとハ京家の産まて父母兄弟
とてもあく夫ゆもあくれ独つまゆく此山奥ま伏猪の床もゆゞらく馴ゆ弘
めいとくハを色ゞふ康のきふ〜て寂覚と問をゆもうきゆ急ぎ衣ゞ里染の糧ゆ
ようや柳の髪も何ゆふ年ぬまゆゞもゆ〜や夫の存ゞ久廻ゞ逢便もあとと三年
が程ゞ泣暮ゞ麻のゆ〜ゆ〜のあさゆ〜く埴面乃柴の志ぞくもゆゞ〜ゆうゞき弘地拙

られゞ袖の〜濡〜霜の消ぬ程とく〜ゆゞとる朝食の烟弘不そきゆ推量ゞ
玉と語ゞこうちゆも雨そこ答言の志のゞ絶つゞふる涙ゆ弘ゞき涙ゆうゆの人ゞと関て
恠〜めてゆ吾も京家の産ゆく故ありて此国ゆ下向〜昨今のゆうゆとゞも
ゆ三業ゞ経ゆ拙ゆ京師ゆ残せ〜妻ゆる者生死今ま知ゞ弘ゞ今ゞ粥のゆゞゆ
も夫ゆる人此ゞゆ玉ゞ又ハ亡人ゆく坐ゞゆ詞さゞゆ事の故ゞとゞさま
語ゆ玉と問ゞく〜ゆく住ゆる粥ハゆ〜ゆゆゆゞさ事ゞゆゞゆも此粥五業の
取さる殿ゆゆ名ゞゞ国ゞゞその人もまゞ七業のゆゆゆ〜ゆそゞよゆ終てゆゆ十三年
の星霜ゞ経ゞゞゞゞ今見ゞ逢ゞ志ゞゞゞ〜ゆゞゞその面影ゞ見ゞ知ゞゞとハ存〜ゆ〜ハ
又逢ふゆのゆゞもゞゞその人ハ島辺山の烟とぞゆふる今日〜も三年の七日ゆ
當ゞ付るゞ供佛施僧の営ゞゞ弘ふゆゞゞゞ〜ゞゞ手向る琵琶のゆゞゞ尚香
の煙ゞゞ〜粥ゞ哀ゞゆゞ〜ゞゞゞ涙ゆ〜ゞ咽ゞく語るゞちゆゆの人ゞよく

不審し給ふに、年七歳の年、千代曩の前と申しける言号の証に、右の臂に蝦蟇の血微と染めり。我らを橋本中将俊季なるぞ。其證は左の臂に、染めりし形いとあやしくと互に有りく左右の肘と揭つ合せ給へば、実蝦蟇の血の痕ありくと濃紅の痣とぞ有りける。我君の姫うとく夢の幻と且驚且喜なりく公用も及ばれ則往昔用堂禅尼や号の後の浅ま形のごくなりしに、蝦蟇の折言消失ぬ。貞女郎、夫十余年を経て夫妻に今をぞ対面珍しかりけるなりく姫は殊さら喜び泣に詞なく今ぞ泪は村雨の袖の葉なさねぬるなり。爰に玉谷真平は腰に靫を負て弩を引き懸て獲物庸兎を捜て狩に山より帰りて、しば肉に男の拘語の声を聞ゆるとぞ思て紫の戸近く倚て耳を側て聞尽るぞ思ひ撫をたさと拍て英雄最強よりの御物語をとて篤と承て驚入ぬと云つも紫の戸閉く間ありと云入く主従面を合つて喜びあくるに限て此時に真平は三年以前今月今日入鹿の日ゆく鳥辺山ゆく密させ給ひしと思ひしに今年今月今日再び廻り逢せ給ふは偏に三年ぞ且暮ぬと悔しく曾て焦せしひありて天道捨給はざる所なるべし然も其日入るぞ九献の後あるせ給へぞ今ぞ申まねび奉らんとさぞめく俊季ぞ云ふ我今夫妻の杯せんは義なもあく背を平あるべいとぞ思ふ魄るのりとて何とかやうん黙止ぐらいあるる色あるに木蔭も真平もこそ何ぞ情由と語せ給へいとやくと問へ俊季語くらく某去年の春入賛とあるに切くだりて薄情しきやうるぞその仔細ありくそもく辺山ゆく既に焼殺るべき狐と脱に當国に下り刺千代曩媛中に諸ども鳥辺山ゆく出ぬ或は死と偽りて此国に落るぞ曰く京都よりの金銭完中あるぞ更に身ともく所ゆく国府の近境に松洞寺と云る林宇に小

ある所縁ありて彼と潜め人を見知れどもを右京と名乗て所住
るるの妻となる色を髣髴して居るゲ住侍まゐ母ふいるる實客のごく侍のもまてるもるく
ゑ人易くて彼人の誘ふ水あらばいづくもいろんとぞもて拙き此寺ふ日毎ふ来りて
碁と圍る禅門某を勧くやるく人国府ふ砥並庄ゐとて代々数百頃の庄園とから
極く巨萬の貨とつ般若長者とりてもやをあり只人の女早く又母ふもく世て年
頃家の長ゲ興ゆく富さるる本圍境ふ比るくの家饒ゲ見ば彼方是方より婚姻を
ひとむまでも佳婿と擇ていまと定るくさもぬ口誓の貌を擇く負とも嫌ゲ見ば呂下
其任ふ當とりやよゑるさゆとて又説くしゆ那女容儀ハさまぐるるるど又
人烈よりて伶倒るるゆハ衆ふ秀唐大和の文ふ文らるる涙恒の号ふ敷
嶼のるる思ひと運び公ざる優ふ艶しくるば極て賢女るるでなど詩り図書某
その時もしらく吾今亢竢の時と侍く通ふ塾るの節るれば即氷人ゲ言ず

遵しふよるづ女の方より整て吉辰を待のるるしふ傅よりある人告く云るるの
家遠祖より代崇ありて毎朝侍を招摩訶般若を読誦をるせざるば必怪
吳ありるるば般若長者といくありるの女といつを蛇身ありとやいくば人も怖て婚と
る者ありるば沉るど足下ふ氷人ふ誰されつるりのるのとゆて某名と閉て半
ハ信ど半ハ疑ひしるど既ふ生る日ふもるりゆ長ば遂ふ公を決して長者ゲ家ふ到し
実や大廈壮厦の搆ふく待迎の者整正と列り筵多の男女さ、めさいるり
形のでく歓と入て後共ふ房ふ入く合巹をると其時の女荒姉といるゲ繡袱
兜頭を脱るゲ焼ふ肩向くさ俯更る面を擡ばさるり差へるとあ一ゑく
うゲ見るふとの容貌色黒くと肥るる顔の色ハ大拱子あるゲのるふつゲて
ち痘瘡の痕るく刷る如く頬の又赤く焼ざけるハ山桃の熟しるふ
ど剃衣の目さ潰て狭唇ありて空と一目又く両ゑるふ絶く三平二滿の醜女るる

荒地二上り山の蛛蛇
お巳越条
して蛇と
念珠をも
きりて
いの
所る

世にハかゝる悪女もあれバあるものかなと限りなく嘆しが彼ちうわうの寵帝嬪
母が醜を愛して落英がゐるがしきにも易ぎ婦徳を愛し玉ふに想あれされバく
日を送り月をかさねし荒妙が氣質を試るに形ハ醜けれど最心ハ拙からで我にしたがひて
よく礼に恨りされバ吾も心もさめやく夫妻間や早くして家の跡ふり一年をへたり
無る神られバ衣を得て食ゆたかにして事し懐ふ孫ハざるてかなしといへども蹉跎として
年を過るハ都の事の懐かしけれども一門連枝悉く亡ければ便もなく終に北
狄に朽ちつる形乃朽もしくいかにしても家門の傾復を計らんかのと再び帰洛
の大願を發し立山権現に祈誓して此春より朝に祈り夕に賽のほどめ怠らず
今日ハ神無月朔日なれバ昨日に今日ハまさきちる外山の嵐もげしく紅葉
の錦地に布るるをみんも甘ぞやと木葉の里まうられ来て不圖再會をなせるも
あしからぬ縁の慈と云ふ宿福の熟と云ふべく侍るかなと心の隈なく打あけし

てぞ語るにぞ木葉ハ首より尾を聞て挹かも今さら心落居せど信真平も聞
居たるがそハ幸の事なり今宵息所併居なさん女ハ誰乃見咎ざらんされバ般若长
者の聟の殿賎山賤の木葉女と互に喚なし思通せまほこそとま両全の計策なり
英忠とも山の猟士と召せてゆへ如さるべとて求し兎を礬と盃を挙て執むすび九献
の議式とまねびたるにも哀ま往る事の志のかぎりを盡し廻る盃のかずも傾く夕月の
山の端ちかくなりぬれバ媒灼ハいたく酔ぬれバいと眠らびんとて真平ものが伏床に入
る夫婦ハ亭の習ひ出居と云所に差入るが誠に垣生の小屋なれバ擔間ある嵐に木
の葉ちらへと二人が面にかゝれバ哀涙の催されし昔ハ玉の臺の隙なる風もいとひ
玉ぎぬの袖引きて今ハかゝる布の衣とてそ延麗風に荊簾打も扇もまゝならざる
浮木の床に菓の窓ちくものとてもなる哀しき縁ぞいふしへの錦の褥とちめる
心と左京輿じくなりしも浮らしき隠家なり松の嵐や峯の雲枕に近き谷の

流れにうつて人知る人もなき閨の裡浩るに易きそと木葉が傍に居寄て積しつ術語らんとする世に忽ち何やらん腿のあたりにぐさと齧咬つ左京叫とひふ及きるを結らく手まさぐり称るに漆黒なる板歯二枚ありと歯ざき入てありし久大に怪しつもそ能く宴紙に包て懐に揣入しが尚人あくく咀砕がごとく骨髄に徹し脳裏まで入痛と管らと厳しかりけれども木葉に知らせじと何気なき体にもてなし夜を語てあひ今宵名にある地して竟にしずぎえの枕をかはし歓喜天壇の衾の上に姑射山嶺の霜を凝も不思議なりける妹背哉かくてえぶれ鳥しが鳴篠日朗明そめ追くが又いつかと約して左京件の歯を袂に急てこそ帰れ

第六

荒妙二上山丑晌参
蟒蛇木葉里七捲纏

雀囀り旭日漸やくに暉くころ左京国府の館に皈りしが妻の荒妙へそや記出て迎へし尓例よりもいとこよなう優て粧拾ふべく大宮に籠るべしとかねて思ひつゞけかくとは知らで夫婦むつまじく朝飧の配膳に侍坐しけるが荒妙の頬あたりに板歯二枚まなく現くぞ見え早晩その歯の脱しやと問に荒妙は音微雅より痔の虫に病みて此のごろも数回て歯を噛み癖ありしが夕君の宿らぬ夜の間髪も掠り歯ぐなくせんやとて歯木を使ひける暁に家くとして不覚切立つる板歯二枚脱ていかにとおもふく見ちり更にあらんやと語る左京懐より件の板歯を取出して吾今うしとかく拾へてといふに荒妙件の板歯を含て挑しめとまへいるに符と節を合せ荒妙よくも拾へ給りしとて其笑る面から頑る誓らざれと左京心中最忌しく荒妙一夜の留主を嫉妬して泓と想ひし一念徹し譫なる寐腕もたり木葉が許なく怪異をなせしは謀にもかかへる女の執念なりと大いに備え繋念を量り却て恐ろしくとぞ唇を翻せりさるほどに左京はえより妄狂ひ

にもあらで雨の夜雪の夜までにも尚たへずして通ふなる色との人等にあらねば只間ありて木葉が許を訪ふ時は健児一僕をも倶ぞせず馬代馳て野外に遊とて出しが荒妙知るやらずもなくつよく貞心を竭し露ばかりも悋気のけしき視へねど笑容歎合更に他事もなかりけり

却説左京此程曾て知ざりしを思へど荒妙原より嫉妬の瞋恚強勢にして左京二寸も圃より外に出る時は必ず後より人を尉て覗せけるが最初木葉が許に駛しより爾来の事は況や知らる事なきを虚知らぬ負して貞女とみせけるぞ怖しき心は怨あさからぬむさげの水のそこふかく大悪心を鄙し何とぞして二人が中を避なんと巧みに左京が木葉の里に駛る夜は二上山に丑の晌参をせぬはなく そもそも此二上山と申は鈹より其乃一里あまりもして実に人倫絶たる深山幽谷なり此山に幾年か経し蟒蛇あり太さ

さのみかくれねども其長幾数十丈あらんも計がたく土人皆恐て叢詞を建蟒の宮などと崇なしけるを荒妙常に事に其も是に祈て呪咀なるに据出しある夜左京が留主なるに例のごとく丑の魅なりの二上山へと出てゆく其扮裳は黒髪被ろに以て鉄輪を戴き胸に鏡を架殆に浄衣をまといて高き木履を踏て先棘川にて清涼の水に下浸垢離とりけるにまぐに如月の氷なるを殆も一念凝ては清浄身になりたるとちひけるこそ愚なる迷の闇ぞとぶらく彼の峰に夜もいとはず尚山ふかく分け入るにかとより幽邃の地なれば蛇多く脚にまといて頸にもかかる煩成就乃兆と喜び蕤そる山の岩が根をまる木履に踏えてこそ巍そるる太山も恐れてそ岩尖荊刈掴に手足をつけながら殆を苦め心を悩をするもものは此丹猜の一念を以かる女め安穏にあくべきやと瞋て罵つつも乃絶なる嶮

岨と木の根葛のかづらにすがりけるを辛じて跡の方にハ又数千丈なる渓河
の下ぬるらきの神も在ハ岩橋を済まくと祈つても推さるにハ岩石崎嶇
嵓ありと此頂に立そ蜂の宮すむと登りつらるも峨々たる荒ぬ目ざるしの幣
をきるくかうろる岩を限として水淘をときつまく中の盤石を坐とし携へしもる
げの糸を饌へたるる祠を拝し祈誓してやるるハ傳さく宇治の橋姫ハ妬しさと
ちふ女を魔殺さんとて貴船の社に祈る宇治の川瀬に浸りて終にその弱生
のがら鬼となりしとるや我もやハ一念のもとるべき此身此まま鬼ともなるべき蛇
まなりて木葉と云ふしめ魔殺し其の縁親類堺男まぐも残ずなくとらふきて
に取滅し素懐を遂るハ未来永劫三毒の苦しひとふまし共ハ此所まて
成就せしめ玉へ拾ハ百八煩悩の数に擬て百八の華表を法施さいまつらんとて
首にかけたる蛇と念珠をほしてきくくと押摩せやうにく祈る不ども蛇ハ首しに

めくさりて虚空を睨て立たるる慄然として身冷ろふなるとぞ見ゆと夜嵐颯
と吹きさく唾腥く霧遍満と立覆ひ颳そとい音凄じくて蟒蛇虚空
より雑下て紅の舌氷の牙を吐て一口に飲て忽然と雲霧の中に形
へかくまて祝へもかのかる荒妙かるる奇特を祝く喜しや我大願の満るよ
おのは木葉看よくと云るる後より肩にすすと掴して我よく看るにけねと云
者あり荒妙殺でふりかへり見れバ大の漢子なり此漢子莞尓と咲て是我ハ是強盗
の張本出邑雲平なり後を跟て你が行状を視し普通の婦人にあらバ我も怕
しとおもへる恐る嶮難の所に深夜にもひとり来つるその膽の硬さ共に大事を語て不足
なり我も麻児法の術を行へバ今より你と臂の力を添て積年成就さしてべしとさ
るにぞ荒妙ハ力に力を得く喜び勇て事成らバ恩賞をまうらほしと
出邑ハ次第を問さバ荒妙ハ飯に飯て暁近く夫の帰るを待て如此々々せよとく

二上山の蟒蛇木葉の里七巻土紡ぐの圖

何事とう諜合々るぞ荒姉ぐ入テ刃の上ま白蔵の結て解ぬ思の怪僧
とろ一念の恐乃さみいづくへか通ぜべきと云う恐ーくぞ天くろ
偖も此夜左京い木の葉北里ま歌ーぶ何と申ん木蔦ぶ顔の色も揚れぐ乳及
何と問ま木蔦ま事ぞ千きてさしてあやめるま伝行どいわる長月のころもと萩の
下葉色げさて居嘆くくこころ[illegible]もより經水不順春まうてよろい梅の酸るどの好
ーく曾支吐逆のまぐ往あるぬ粥とろ[illegible]しゅん差ある時い憂ぶ中ま君の公を
いま図なる事よりと後の想とろ～侍るとらふ左京芸を閉てろ泰や子孫のさろ
ゆく基吾喜ま堪ぐ行粥も一子と儲るま女子の大幸此上やある義ぐべ別深て
五ケ月あもあれぐ懐胎ま[illegible]れやあぶん荒姉子のうさとうぐき此ま妾をぐ
めつるぶ此ゆ云あるぐべき時到りぬあとろん妊の弟ともーて纐弟の賀とも催ふ
しろんとい云ま千代もとろぐき欲ぐく小夜の枕と河岸のふうき契乃ぐうぐて

結めいとる下紐の解る不どろぐ睦言もつきぬ詞の花咲く匂ひの中ぐと床の裡留り煙と
炷ろわくきゆる間憐ーさもりうるま怪我桃の下よりちいさ紀陀三ぐ[illegible]ろ[illegible]
ろ[illegible]首と擡げる眼ーぶ素ま一人の面ま熱ぐとおちりてぐ見へろ[illegible]ろ木蔦ハ二ろ
そもいろまと怕まぐと左京ハ直ま火熱の鐵箸を把て頂と下と膊るま蛇即犯の下
ま戈入ーぶ猛拉とーて数々と音ぐ慢々と裂る音何ぐも紛ぐも最怪ーろ[illegible]ば
いよく孫ぐと一ぐま外面より真辛弓箭手挾ぐ張ーく入ま大息ぐ吹ぐいふ
さても入テ茶搭ま蚰蛇ぐ[illegible]ぐ尾首も祝ぐ[illegible]ぐ去何十尋ぐーぐ計
ぐ[illegible]ぐ菴ぐ取捲右ぐ[illegible]ま汚牙の上の素づ[illegible]ぐ件の蛇ぐ撥あげ檜ぐ紙ぐ[illegible]
立入ぐとぐ[illegible]ま一陣の怪風振起り萩ぐ[illegible]の裏ぐ[illegible]池日ぐ法口狐[illegible]
つぐ[illegible]ぐ蚊ぐ[illegible]ぐ射留ぐと弓ぐ箭打ぐ[illegible]ぐ毒素降下霧雨[illegible]
烟のぐく消失ぐ先ハ悲ぐ坐つぐと詩るも閉もいぐーく其蛇縛[illegible]

めと祝しふさぎうの蛇ぬんとそも如何と咲て刃もろろうさて
の不測は指燭さきして前剪と祝ふくくはべ後園の大竹十四五本鬱のちく
てぞありくるこを件の蟒蛇ぐ磅礴跡者とくべ尚淪く左京舌と揖て
木葉は公つけよと直平はヤ遣しその形公ぬ祝べ宿を急ぎて柴の戸の
外は出しるこてふ又離の傍ふ三尺十計の蛇蟠めろう左京祝るよう究忌しと急
ぎ谷の柴橋を渡るふ件の蛇もくくと後と慕ひ来つるぞ怖し左京敢固
ふりくくとふろ行は何国迄も却くくる形勢うるべ試は忙しく走るべうの蛇ひさ
ちふ襲ふるちづくふ共のべ徐々ふく止るべ又とぐはるろくくして国府の鍵ふら
到りしふ件の蛇消るぐとくくふくぞうりぬ左京ろもも丈らく吳ある想きいぐ
荒妙ぐ執念のうも業うど竟ゆるとぐ豈拙らん渠ぐ貞節ある恒は絲髪の姫は
おりふは木の蔭の里八斤山里の陰地ぐれべ蛇ぐろ奇怪もふるうさてうの蛇再び出るや

と須之外面ふ躊躇めるふ荒妙いまぐ赤縛ゆしぬとふくく国の燈あらく窓の障子
ふうつ諸母の刀自と侍児の火女ろあいさして物ぐろうの声きこ四左京あ〜ふるや
宿の主乃留主うるべ渠ぐる暁まぐも宿直とうも事よふふ何ろと語るかうんと
透垣の下ふ形を側て聞ふふ荒妙ぐ声とそ昔の業平朔臣高安の想人へ通ひ丈ふ
ふ妻の井筒の前ハをこも妬ろして風ふけば沖津白浪立田山夜半ゆ若ぐ
ぬとうこあうんと詠ぜ〜ふ業平此一首の哥ふ妻の貞公と感じて言安へ通ふふ
と毎わ〜臣とぞ〜る負ろる公こそろ〜め我ゑこそ太山ぐくきの朽木ろと公と
花ふろふべうろふ公ふ嗜ぞう〜とふくふふ諸母の刀自ぐふ君ひまぐ知食
ぞや殿ふハ公年より木葉の里ふ妾をもろせ丈ふうりさとべ宿ふハ潮のうし〜る
ゆうふ落居ぬハぞりのふ諺てハ通ひ丈ぐど君ふハ何事とも倚ぬハざる丈入聲の
恐れすく我任ろる姿動とう〜ふふうり今宵ろどもうの許ふくハ飲や唄ふふ

酒宴のほさろうるべき浦山しさようの妾二再殿と濁し参せく春の夜乃
梦ざろうる契とや託ち明るとおしきやそうんふこるくふ只秋風の吹荒し園
さびしくも涙坐あくく春の夜乃夢もむすびせむつねに痛しさよ姫のゐどこそ
けくくと丑へと此ゐどゑ白地よ我々よ宣ふゆう荒妙と木葉とゑ深山木と都の花ゑど
吹聴しふ涙ふくさよ我々君とおのゑも我粥のうへ中と曾の火乃消る間ゑく打出し
さ次者ゑりくく涙賢ゑ夏ゑるとうしと掾てぞやる左京豆と閑てさてハ此天探女
讒言と構ると覚ろうえとうふ佞く腰ゑしさのゑるとゑ丑ゑくさゑ老婆ゑ
ヤ糸うゑと怒と呑いよく耳を峙て閑ゆうう傍より又結児の女ゑさし生て
去ゑるハさるとゑ一大事を閑付りぬうの妾ゑハその月よりの孕ゑくたゑや五今
月の粥ゑるうくさるとゑ歩若通せふも理ゑうゑかの妾々京女膳の最ゑ女め
うしくて涙ふつまるし事どもうりとぞ義ゑぬいふうちゑしゑ思食どやと

交言ど巧ゑヤうり左京驚ゑ渠答ゑいどて密夏と知しやうく巧言しく荒妙ゑ
ふどど動し姫毒ゑるゑちゑくハ大事ゑうり是ハ悲ゑ思ろゑさくかくうんとうりハ明ゑ荒
妙よ苦くかし姫ゑしゑ則ゑハ聖人の法ゑうり何とうゐらんと閑ゑ荒妙言葉ど正
して去ゑう你答ヤさどとも殿と木葉の庁中ハさくとうり知しろと曾中霧ゑ恐
ゑし抑婦の徳とゑハ嫉妬せざるど才とゑむうしとうり嫉妬ゑうき女の此ろう鬼と
ゑハ蛇とゑうり丑の晌参ゑるゑど人と兄咀ゑ妾艸おのゑうへゑど生とゑふ可き
讀ゑしつ最魄しき事ゑるゑや殊更木葉女膳ゑハ都育生と閑ゑしつは
さそゑ容も丑も艶しうるゑめと奥床しゑま姉妹のろひとゑうりゑあち是誕生
あるろし吾倣艱ひくさうゆく未の楽ゑもとゑハ丑も知しぢてにさゑゑき詞ど
や此後努くいくゑどそゑし迷ゑの者ようとて詞情しくヤ閑ゆ刀自と火女ど
嘶魄ふきくく声ども做さね素辛うり左京ハ此詞と閑て特ふ感じ渠答ゑ

しる事ハ絶こそ取肴ぬ荒妙が忍衷の程こそ徒なる給とおもひつゝ何気もなく
体にて打歎声妻戸推て内に入ばカ自と少女ハ右京を見るより愧面燃る
が如く針の筵と思ひ冷えふ召てものが局にぞ退ぎける是元来大なる僞
なり荒妙力自少女に中合らくかくハ言せ巧なしつるなりとハ知らるも右京
荒妙に對ひ今外面なく浮身の秘操あらがねと聞て我差慚ま堪ぬ始より
語参もべきなれどと吾贅婿の形として中園ま奥まる事ハそら怪かるは
しあらざりしが今ハ信を告らくや妻ハ木葉妊娠して早や五ケ月になりねまさば
あまつさへ妊の寿を悦いさゝか纈帯の賀をもさせなやとぞ思へるが此る形の秘一に
になり老さきたのむ便にもなりなんとのぞいともしく思ひより玉なるやと云もあへ
ねに荒妙ハさらも嬉しき満面ま溢ぎ云ハあらゝまりける詞よ何あるきのこりすま世
まにとくよりも同参きんとおもひしかどさのみ此浦のもるれ降せ玉ふ君の風情
なるに強て問参まるもいかや志ろ孫ぞゆかしく思食らんとおもへつゝ公の裡ふハ
我家何の不足なきもぞ嗣子のあらざれバ寵愛の傍妾婢女幾多召
さるゝとも些も験なく打過せ玉ふぞ御心扨しと思ひつるなかく
明せ玉ふらへハ何ぞ此うへの喜あらん木葉女なや五ケ月になり玉ふとや自
日を二駒にも促なやく若の出生が見たきと思へバ今よりの楽しさよとなく
欽喜の気色斜ならざりけりその亞乃日荒妙一子を儲るハ我家長久の基
なればハ纈帯の寿ぎ疎なるべからずとて産養の引出物付々を整信實にまかせと
言つくるを左京ハ木葉いかばかりの喜びつべしとて則件の贈物と従者ま侍
廿木の葉比里にぞ到りね

千代曩媛物語巻之二畢